

岐阜月朋

ぎふどうぼう

- 能登半島被災地ボランティアレポート
近藤智隆 土岐康代 近藤龍磨
- 蓮如上人と美濃の真宗(2)
—美濃真宗の歴史③ 安藤 弥
- 編集後記 山下憲二

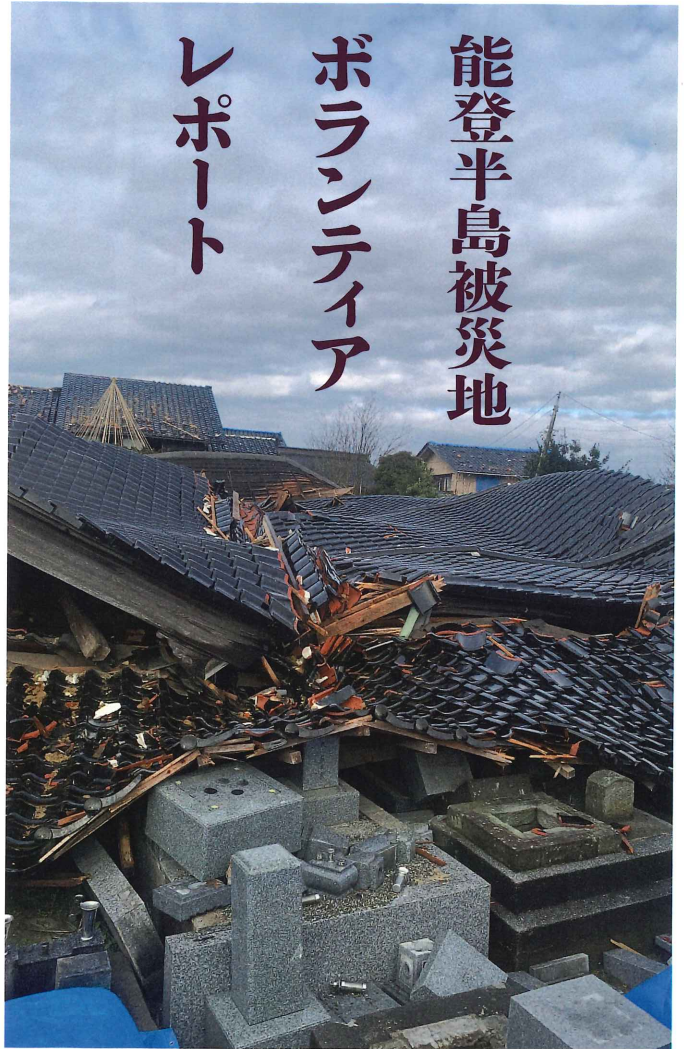
2025.06 **131**



土足のままで“仏壇じまい”のおつとめ

石川県鳳珠郡能登町

能登半島被災地 ボランティア レポート



被災地の現状

近藤智隆

地震発生から一カ月程経った二月初旬に能登を訪れた時に会いさせていただいた、住職の方々が口にされていたのは、

「ご門徒の方が、どこに避難されたのかわからない。もう、ここには帰ってこないと思う。」

という言葉。

お寺を護るために、一カ月間以上、水も電気も通らないお寺に住まわれ、お寺を護られている住職達には何が見えていたのでしょうか。

三月にボランティア活動で訪れたご門徒宅の片づけをした時のこと、家主の方との待ち合わせ時間より早めに現地に到着したこともあり、近くの大谷派寺院を探し訪れました。そのお寺は無住寺院となり、住職の連絡先が玄関先に貼られていました。

この後、作業をお手伝いするお宅からは、仏壇じまいのお勤めを依頼されていました。大谷派僧侶とはいえ、なぜ他県の僧侶にそれを頼むのか不思議に思っていました。多くの住職がお寺を離れられている現状を知らされました。

真つ暗な仏間で、蠟燭の灯りに照らされ、スタッフ全員でお勤めをすませ、まずはお内仏の片づけから始めました。そのご門徒は夫婦で仮設住宅に住まわられており、現在の家は取り壊すことになり、その後、どうするか不明だということ。お内仏をしまわれるとのことでした。ご門徒夫婦とお寺や真宗の教えとの繋がりがこれからどうなっていくのが気になりました。しかしご門徒夫婦には、今、その時を生きること、精一杯で、先の見えない仮の生活、二月一日以前の生活に戻れるのかという不安に襲われていたのではないのでしょうか。

五月に訪れたお寺では、総代

の方、三名も来られ、一緒に境内の片づけをしました。

軽トラで、指定の災害ゴミ集積所に向かう道中に総代の方が、

「震災前でも門徒が減っていた。震災後、多くの門徒が地元を離れて暮らしている。その人達はこの戻ってくるのか。さらに、門徒が減っていくのがわかる。お寺の維持をどうしていけばいいのか。」

と、肩をおとして語っておられました。



その後、休憩の時に一人のスタッフが、総代の方と震災当日の様子についてなど色々な会話をしているなかで、

「今後、私達にできることはなんですか？」

と尋ねると、総代の方は、

「片付けかな、特にお寺さんは。食事は何とか店で買えるようになったが、なかなか片付けが来ん。」

と言われ、総代の方は続けて、

「自分達の話を聞いて欲しい」

と言われました。

能登を訪れ、寺族、ご門徒の方々と交流する中で、地域、お寺を離れられて暮らす方、地元に残りお寺と共に暮らす方、どちらの方も様々な事に悩まれて、今も生活を送られているのだと感じさせていただきました。



毎月のように能登を訪れ、道路が少しずつ通行できるようになり、ボランティアで移動する不便さも少しは和らいできた矢先に、今度は豪雨と

いう災害が能登を襲いました。

十月初旬に訪れる予定のお寺は、最も被害が深刻な地域だったこともあり、当日、活動にいけるのか不安でしたが、何とかお寺へ赴くことが出来ました。

目的のお寺に近づくにつれ、増えていくナビの「通行止め」の表示。道路脇でせわしく動く重機。豪雨災害の被害の甚大さを感じながら、車を走らせていると思わず車を止めてしまう光景が飛び込み、目に映る風景を無

言で眺めていました。

その後、大通りを曲がりお寺へ向かう農道にさしかかると、そこにも目を疑いたくなる光景がひろがっていました。田園地帯であつたであろう場所は、流木、土砂に埋め尽くされ、水害の凄まじさを物語っていました。ふと目をやると田園地帯の中央を貫くように流れる川に架けられた橋の袂に、一軒の家があり何か作業されている様子だったので、お声をかけさせていただきました。

その老夫婦は、震災で仮設住宅に住まわれていて、ようやく家に戻れるところだったそうです。しかし、家は震災以上の傷を負い、とても住める状況ではなくなっていました。おばあさんは家の中から大事そうに、ご自身で漬けられた梅シロップの瓶を車に運ばれていました。少し曲がった背中では、とても物悲しそうです。



「去年漬けたこれだけは無事だった。よかったらあんたらも飲むかい？」

と言ってくださいました。おそろくもつと話を聞いてほしかったのではと思いましたが、後ろ髪を引かれる思いで作業依頼があったお寺へ向かいました。

能登半島被災地 ボランティアレポート

ボランティアに参加して

土岐康代

能登半島へのボランティア募集の案内を手にしたのは、元日の地震から五ヶ月ほどが経ち、被災地の情報も少なくなった頃です。

「私でも参加できますか。」

思わず教務所へ問い合わせていました。これまでは子育てなどが最優先で、被災地へ出掛け

たことは一度もなく、報道で見聞きするだけでした。しかし、子どもらも社会人になり、自坊のことも調整できるようになってきたので、今ならボランティアに参加できるのではないかと思いい応募しました。

私の初めての被災地支援は、震源地である珠洲市でした。寺院の庫裡の片付けや、処分するものを仕分けし回収場所へ運ぶ作業です。前泊した能登教務所から二時間ほど掛けて向かい

ました。

そして、このたびの大地震による液状化現象で、とうとう基礎から柱が浮き上がってしまったようなのです。そのほか、戸、梁や欄間と至るところに地震の影響が見られ、すばらしい材木で建てられた立派なお御堂が、均整の取れない姿になっていることに心が痛みました。

『自然を前に人は無力だなあ』

と、全身の力が抜けていききました。私自身も当たり前でないことを、当たり前にしてきた自分自身を知らされました。

時間は限られています。地震の後の雨漏りなどで傷んだ思い出の品や法衣を含む大切な品々を淡々と選別されるご当家と相談しながら、黙々と作業を進めました。これまで何から手をつけてよいかわからず途方に暮れていたつしやったそうですが、作業終了後には安堵された様子で、つかの間、私もほっとしたのでした。今回、改めて現場に足を運ぶ



ことの大切さを実感いたしました。現状を目の当たりにしたことで湧き上がった感情は、長く私の記憶に残ることでしょう。初めてボランティアに参加させていたでいて、

「自然の怖さを知っても、事実を事実として受け入れることができない我が身のあり方」

を問う、きっかけをいただきました。今後も機会がありましたら、是非参加させていただきたいと思っております。



現地へ到着し、車内から見るお御堂や庫裡は倒壊の難を逃れ、その立派な造りに思わずため息が出ました。しかし、車から足を降ろしお御堂の前にしたとき、言いしれぬ畏れにしばし立ち尽くすしかありませんでした。立派で重厚なお御堂がこれまでの地震でも何度となく揺らされてきて、

能登ボランティア心模様

近藤龍磨

秋の足音が聞こえる今日、心地よい長良川の風が吹き渡る本堂前にて、朝日を浴びながら、一日が始まった。能登半島では、正月一日、大きな強い地震が起こった。そんな中、私はこの町を追われることもなく、ありきたりの日々の中、当たり前のように毎日が過ぎてゆく。このことが特別なのだと、三月から開始した能登ボラン



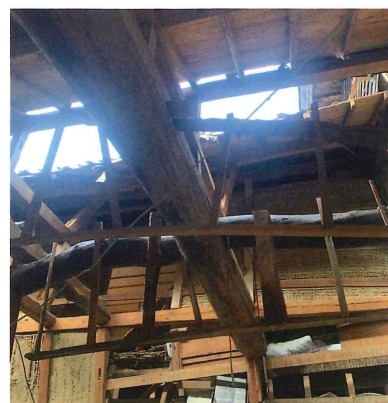
ティア活動から毎回教えられてきた。

一九七五年から、北陸・関西・中部電力三社による奥能登での原子力発電所十基建設の動きが始まった。奥能登の珠洲や周辺の住民達は、

「原発は、わし等のふるさとはにいらない」

という思いを持って非原発運動が始まった。

二十八年間にも及ぶ運動(南無阿弥陀仏と書いた^{むしうはた}旗のもとに座り込み)には、数々の挫折しそうなことがあったと聞いた。それは、電力会社による原発マネーの凄まじいばらまきによって、団結していたはずの絆に^{きずな}綻びが見え始め、非原発運動から退^{しりぞ}いて賛成に回る人たちが出てきたということだった。その時に、この運動のリーダーであった真宗大谷派の住職がテレビ番組の回想の中で、



「個人攻撃はするな」

「強い者に味方したら坊主でない」

と、先人達の教えともいえる生き方を貫いたことを語っておられた。そして、電力需要の変節などがあり、電力会社は能登から引き揚げていった。

残ったのは、住民同士の修復不可能ともいえるようなわだかまりの思いだけであった。

今回の地震での暮らしの中で、住民達は

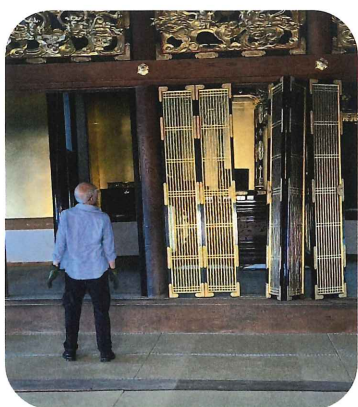
「原発を止めて本当によかった」

と、わだかまりを超えて笑い合ったという。

原発が出来て動いていたら、関西、中部、日本の全体でだけの人々が故郷を追われ、家族がバラバラ、地域がバラバラになっていたのだらうと、能登に足を運ぶたびに思うことである。

七月のボランティアで、初めて復旧が始まったといえるような、重機の音がしていた。地震から半年後である。しかしながら、今、また能登は原発ではなく水害という大きな試練に立たされている。十月に教区から七人のスタッフ、能登に入りボランティア活動を二カ月ぶりに再開した。

地震の時も息の長いお手伝いが始まったと思ったが、今回の水害でその思いを新たにしている。



蓮如上人と美濃の真宗(2)

美濃真宗の歴史 ③

安藤 弥 あん どう わたる

前回(連載二回目)は、戦国時代に蓮如上人が特に名号本尊を門徒に授与する教化活動により本願寺教団が形成され、美濃においても不破郡・安八郡、また郡上郡、そして木曾三川流域などに、地域門徒集団の形成があったことを紹介しました。今回はその続編ですが、蓮如上人の教化を受けていく門徒集団の現実的一面に注目します。

蓮如上人(写真)の教化を受け、各地に本願寺門徒の誕生が見られましたが、その中には、蓮如上人から「秘事法門」と呼ばれ、教えの理解に誤りがあることを厳しく問われる人々たちもありました。「秘事法門」とは浄土真宗において誤った教えの受けとめの一つとされ、教えの内容を秘密裏に伝え、その内容を秘匿することで権威付ける「異義」と理解されています。

美濃を含む東海地域においても例外では無く、とりわけ応仁二(四六八)年に、蓮如上人が厚い信頼を寄せていた三河国

佐々木の如光が没して後、教えの理解をめぐる混乱が生じたと蓮如上人が憂慮する事態になりました。その状況を把握、整理した蓮如上人の覚書の内容

が二通、残されています。そのうちの一通(富山県行徳寺文書)によると、文明八・九(二四七六・七)年頃に三河国野寺(本證寺)に關係する僧侶が伊勢国門徒に「秘事法門」を授けたといひます。その僧侶が説いたといひ内容は次のようなものでした。

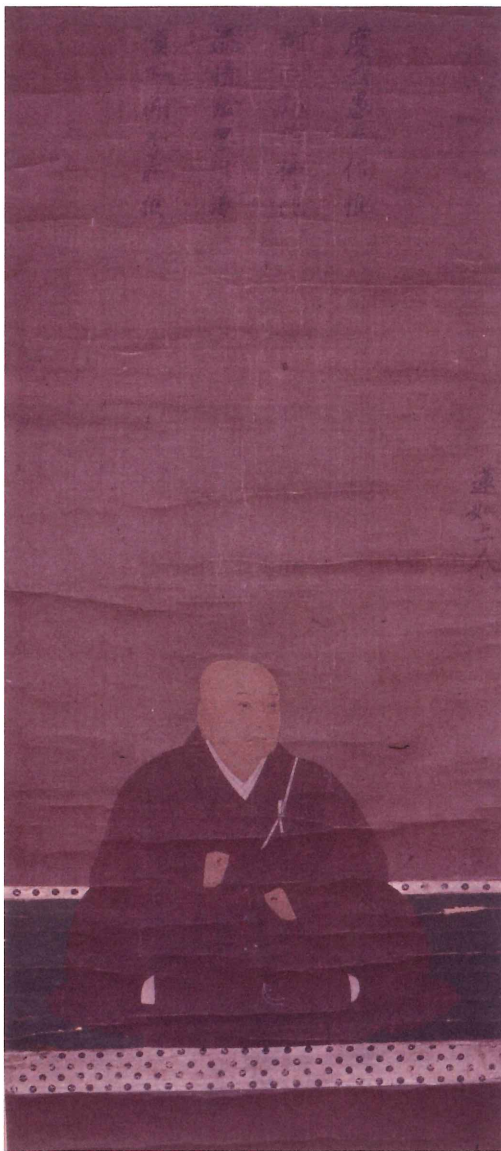
①北陸越前の吉崎御坊にいた蓮如上人から自分だけに密かに伝えられた教えがある。

②その内容は、「仏性」(仏となることができる性質)が自身の心にないと思えば迷い、自身の体にあると思えば、そのまま「如来」であると信じるのが

「正理」である。

③また、そのように伝える者を亡くなった後の如来であると信じるべきである。

このうち、①はまさに「秘事法門」でそのような教えの伝え方は確かにありません。②は難しいのですが、誰にも「仏性」があるといふのはまちがいでなくとも、それを思えばそのまま「如来」であるといふのでは自力で仏になれると言っていることになりません。阿弥陀如来によって救われていくといふ他力の信心とは異なっています。そして、③は阿弥陀如来といふ本尊(仏)



【写真】蓮如上人影像(安養寺蔵)



昨年度より、岐阜同朋をはじめ、各紙の記事には能登半島地震の記事が多くなりました。昨年の正月早々に起きた大地震に次いで夏には線状降水帯が発生し大水害を被り目を覆う程の惨状に、日常では考えられない状況です。

私の仕事関係では、組合に県、市を通じて災害復旧要請が有りライフラインの復旧に若手の業者が、七尾市に昨年の3月に10日間程車両、機材と共に10数名の人員が、出勤していきました。

作業によつて1500世帯以上の断水を復旧させたとの報告でした。寒くて手が凍り付く様な状況の中での作業は、大変辛い仕事では有りますが、能登の惨状を思うとやり甲斐のある仕事だったとの報告でした。

道路に埋設されている水道本管は、継手から外れ一般の住宅の水道管は切断され土壌などの混入が有り、復旧には管工事業者が数年に渡つても元には戻せない状況です。

また下水道管は地面の隆起により管の勾配が無くなつたり、コンクリートの中間継ぎの破壊により下水道の機能が無くなり、社会基盤の喪失となつて住民の方にとって

は仮設住宅での暮らしが、長期に及ぶ事とされます。

その様な状況では人々の被災地からの人口流出は止まらず、能登地方の集落の維持も困難になるだろうと思われませんが、それでも能登に戻ろうとする多くの方々がみえます。その中には真宗門徒の方が大勢おられ真宗寺院も数多く有ります。

私達の教区にも本山より支援金及び物資の要請が有り、岐阜高山教区では東日本大震災を上回る金額が集まり、本山を通じて能登の方々に送金させていただきました。

また多くの支援が国内のみならず、世界中から集まっているとの事です。その様な事態の中でも、教区の有志の方々も何回にも分けてボランティア

で寺院の整理、片付け、一般の家での水害による土砂の掻きだし等の作業に行かれる方も多くみえます。大変辛い作業ですが復旧に向けて長い年月が必要だと思われれます。

多治見市管工事協同組合

山下 憲二

